

# Weekly Survey

ルイジアナ州知事選で元KKK 最高幹部でヒトラーの信奉者でもある D. デューク候補が白人層の支持を集めて40%近くの票を獲得。その人種差別主義、大資本排撃、「白人の巻き返し」といったデマゴギーがこれほどの支持を集めた背景には何があるのか。

中嶋嶺雄

今週のカバー・ストーリーは "Your Masterpiece is Missing" (pp.60-67) と題して、昨今、国際的に頻発する美術品の盗難を取り上げている。日本人は近年、世界の名作を数多く購入し、結果的に盗難頻発の一要因となっている価格の高騰を促している。美術に直接の興味がなくとも、ぜひ目を通しておくべき記事である。

## デューク善戦の意味

最近、日本でも新聞の紙面を賑わせた、ルイジアナ州の知事選挙については "The No-Win Election" (p. 39) と "David Duke and American Decline" (p. 68) のふたつの記事が掲載されている。

今回の選挙におけるデービッド・デューク候補は、半世紀前の大恐慌時にルイジアナ州知事として君臨し、マッカーシズムで有名なジョセフ・マッカーシーとともにアメリカ現代史上最大の扇動政治家（デマゴグ）と言われるヒュー・ロングを彷彿させるものがある。

ロングは、反黒人主義を掲げたわけではなく、その意味では中・下層階級の「白人の巻き返し」(white backlash) にアピールしたデューク候補とは体質的に異なる面がある。しかし、伝統的に東部エスタブリッシュメントに対する反感が根強く、いまでもロングの誕生日を公の休日に行っているルイジアナ州の急進主義の温床としての歴史を今回のデュークに対する根強い支持の背後に見て取ることができる。

ふたつの記事のうち、後者は米国内の1州の問題を、世界における米国の地位にまで結びつけており面白い。米国の覇権の衰退は、周知のとおりポール・ケネディの「大国の興亡」が出版されて以来、

米国でもその他の国でもかんかんがくがくの議論を呼んでいる。ハーバード大学政治学教授のジョセフ・ナイは、ケネディに反論して、「不滅の大国アメリカ」という本を出したりもした。いずれにせよ、米国の経済はいまかなり悪い状態にあり、冷戦終結の「平和の配当」(peace dividend) を受けられない国民の不満は募る一方である。経済だけでなく、教育の荒廃、人種・エスニシティー問題の先鋭化、それに最近多発している無差別発砲事件など、米国の国内状況は決して明るくない。米国は冷戦に勝ったと喜んでいたのも束の間、冷戦時代の主役であった米ソは、現在両国とも国の存亡をかけて苦闘しているようにも見える。

来年の大統領選挙に向け、国内経済の不況を乗り切るための具体的なプログラムを提示できるかどうか、ブッシュ大統領の再選のカギとなろうが、デューク候補の大統領選挙への立候補も噂される中、再選への道は予想されていたよりもはるかに厳しいものとなりそうである。

## 血で血を洗う民族抗争

今週の World 欄はすさまじい内戦を続けるユーゴスラビアの状況が "The Human Cost of War" (pp. 24-26) と題して解説されている。EC の強い調子の停戦勧告にもかかわらず、過去5カ月の連邦軍（セルビア軍）によるクロアチア侵攻で、すでに7000人以上の人命が犠牲になっているという。クロアチア共和国南部の有名な観光地で、世界でもっとも美しい由緒ある海岸の城壁都市ドブロブニクが砲火にさらされている写真も出ているが、わたし自身かつてこの地を訪れてその風光に感嘆した思い出があるだけに、このようなエスニシティー紛争のとめどもな

い泥沼化に心が痛む。冷戦の崩壊はこうした民族紛争の血みどろの悲劇という代価を払わなければならないのだろうか。ユーゴスラビアの内戦は単なる悲劇ではなく、冷戦後のヨーロッパの安全保障のあり方が問われているのだというストロブ・タルボット記者のコラム "Fidding While Dubrovnik Burns" (p. 27) と併読すべきであろう。

## 東チモールで流血の弾圧

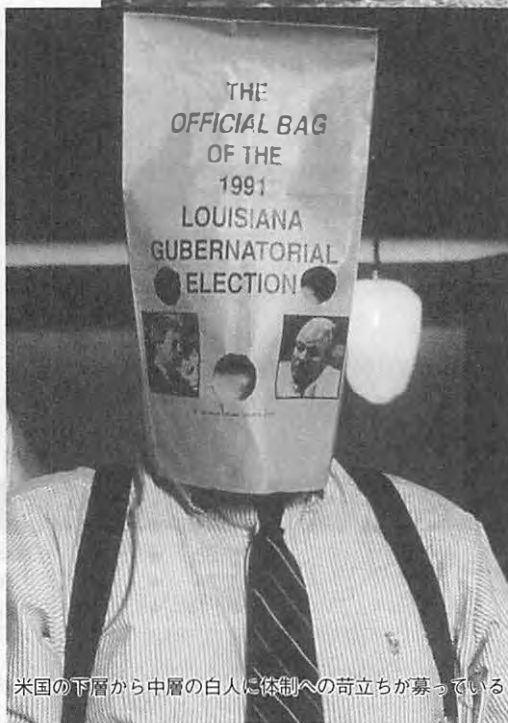
目をアジアに転ずれば、この11月中旬、インドネシアの旧ポルトガル領東チモールで、独立を叫ぶ群衆にインドネシア国軍兵士が発砲し、スハルト政権が1967年に同地域を併合して以来最悪の惨事となった事件をリポートした "The Graveyard Massacre" (p. 23) と題した記事が出ている。今回はアメリカ人記者が現地に居合わせたために事件の深刻な状況が報じられたが、人口の5分の1が殺された16年前の悲劇にもかかわらず、人口約70万の東チモール州の州都デシリ（人口10万）を中心に根強い独立運動の地盤が残っており、今回の事件につながったのであった。国連も注目しているだけに、インドネシア政府は、この事件によって外交上も苦境に陥ることになりそうである。

## 異性間性交渉から広がるエイズ

"How Safe Is Sex?" (pp. 34-36) と題された記事では、エイズの問題が扱われている。エイズ (AIDS) は Acquired Immuno-Deficiency Syndrome の略で、後天性免疫不全症候群と訳されている。83年から91年の間に、アメリカにおける成人のエイズ患者数は2032人から4万3050人に急増した。日本でもその数は300人に近づいており、89年にはエイズ予防法が施行された。



平和の回復まで後どれだけの犠牲者が必要なのか



米国の下層から中層の白人に体制への苛立ちが募っている

マジック・ジョンソンと言えば、彼の名前を冠したスニーカーが販売されているほどの人気バスケットボール・プレーヤーだが、彼は先日、自分がエイズ・キャリアであることを公表した。彼は自分が同性との性関係を持ったことがないことを強調し、このことが異性間の性交渉によるエイズ感染の可能性の問題を浮かび上げさせた。

異性間の性的交渉によるエイズ感染は、世界的に見ると75%に上る、と世界保健機関 (WHO) は報告している。米国ではその感染数はまだそれほど多くはないが、

その増加率は他の原因 (同性間の性的交渉や麻薬の回し打ち) によるものをはるかにしのいでいるという。

この記事では、いくつかの予防法によって、異性間の性的交渉によるエイズの感染は十分防ぎ得るものだと述べて、われわれがパニックに陥る必要はないと訴えている。

最近、あるテレビ局は米国で初めて、避妊ではなく健康上の有効性を強調するという条件に、コンドームのコマーシャルを放映することを認めたそうである。

(なかじまみねお / 東京外国語大学教授)